现代日语省略现象研究

从认知语言学与语用学的角度

朱立霞／著

ZC414
11/2004

黑龙江人民出版社

现代日语省略现象研究

——从认知语言学与语用学的角度

朱立霞　著

黑龙江人民出版社

图书在版编目(CIP)数据

现代日语省略现象研究/朱立霞著.—哈尔滨:黑龙江人民出版社,2004.4

ISBN 7-207-06238-9

Ⅰ.现… Ⅱ.朱… Ⅲ.日语—省略—研究 Ⅳ.H363.6

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2004)第 037320 号

责任编辑:张晔明

装帧设计:李　梅

现代日语省略现象研究

Xiandai Riyu Shenglue Xianxiang Yanjiu

朱立霞　著

出版发行	黑龙江人民出版社
通讯地址	哈尔滨市南岗区宣庆小区 1 号楼
邮　　编	150008
网　　址	www.longpress.com E-mail hljrmcbs@yeah.net
排　　版	黑龙江人民出版社激光照排中心
印　　刷	黑龙江省商业厅印刷厂
开　　本	850×1168 毫米 1/32　印张·8.125
字　　数	200 000
版　　次	2004 年 4 月第 1 版　2004 年 4 月第 1 次印刷
书　　号	ISBN 7-207-06238-9/H·212

定价:18.00 元

谨以此书献给——

我的导师徐昌华先生和我的父母！

徐昌华教授序

《现代日语省略现象研究》一书即将出版，我感到十分高兴，并表示热烈的祝贺。

本书是朱立霞同志在她的博士论文的基础上撰写而成的。选择省略来研究是很有意义的。因为省略是语言中常见的现象，而日语又是省略现象非常发达的语言。有的日本语言学家把省略列为日语的一大特色。迄今为止，很少有人对省略现象进行多层面的研究。本书从认知语言学和语用学的视角研究省略，在理论上、实践上颇有价值。作者思想敏锐，富于创新意识。本书的创造性成果主要体现在以下 3 方面：

1、崭新的角度，即用“非言语化”这一概念来定义省略；

2、提出并初步验证了认知、语用、语言结构三个层面共同制约省略发生的解释模型；

3、论证了省略现象的语用功能。

认知语言学是 20 世纪 80 年代以来兴起的新的语言学科，处于语言研究的前沿。作者运用认知语言学的理论与方法较好地回答了省略什么，为什么要省略以及省略的可能性等问题，有较强的解释力。本书对认知语言学研究与日语省略的研究颇有裨益。

希望立霞同志在日语语言学研究方面与时俱进，再接再厉，取得更多的成果。

北京大学 教授、博士生导师

徐昌华

2003 年 8 月 20 日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

胡振平教授序

朱立霞的博士论文《现代日语省略现象研究——从认知语言学与语用学的角度》一书运用认知语言学与语用学的理论从认知、语法、语用三个层面对现代日语的省略现象进行了多视角的探讨。

“省略”是日语常见的语言现象，省略句的使用频率高也成为日语的特色之一。过去一些学者的研究，一般都局限在语法的平面上，而且很少有全面系统的研究。该论文对本学科及相关领域的前人成果及前沿研究现状有较全面的把握，有批判有吸收，突破了以往研究“省略”的定型模式，提出省略现象是由说话人的话语产出与听话人对话语的理解机制所决定的，并使用“非言语化”这一概念来界定“省略”，它对于研究“省略”这一涉及语义、语法、语用多层面的语言现象具有较强的解释力。

本书就以下四个方面展开深入分析：“省略”的定义、省略句理解过程、省略发生的制约规则、日语与汉语省略使用状况的异同及其原因分析。书中探讨了语境因素如何在省略句理解中发挥作用，初步构建了理解省略句的认知模型；进一步完善了在认知层面制约省略发生的“焦点言语化原则”；分析了语言结构和语用层面制约省略发生的原因，提出了三个层面共同作用的省略发生解释模型；并运用日汉对译语料对日、汉语中省略现象的使用情况进行了定性与定量分析。论文具有一定的理论深度和较高的实用价值。

小朱是我的学生，她的硕士论文是我指导的，当时她的学术敏感性和研究的前趋性就已初见端倪。作为应届毕业生考取了北大博士课程。三年苦读，终于结出硕果，博士论文作为专著就要出版了。我通读了全文，学到了不少新东西，为她取得的成绩感

到高兴。谢谢她的指导老师、我的好朋友徐昌华教授。以上是为序。

日本语教育学会海外评议员
原中国日语教学研究会会长
胡振平

2003 年 8 月 26 日

中文摘要

与英语、汉语等语言相比，日语是一种省略现象极多的语言。但是对日语省略现象进行的系统论述并不多。本书运用认知语言学与语用学的理论对这一现象进行深入研究，阐述其规律，并与汉语进行了对比。本书注重语言使用者的认知作用，认为省略现象由说话人的话语产出与听话人对话语的理解机制所决定，并与语言构造相关，从这一立场出发来考察省略问题。本书的研究成果将有助于对省略现象的研究与日语的二语教学。

针对先行研究的不足，本书就以下四个方面展开深入分析："省略"的定义、省略句理解过程、省略发生的制约规则、日语与汉语省略使用状况的异同及其原因分析。

以往对日语省略现象的研究中，很少有人对"省略"这一术语作过严格定义，大都是对其做想当然的运用。汉语研究中对"省略"的定义也存在很大分歧。那种认为省略存在于句子之间（一种言语形式是另外一种言语形式的省略）的认识显然不能反映"省略"现象的本质。本书尊重语言产生的实际，用"非言语化"这一概念来定义"省略"。"非言语化"反映了从概念到句子形式的认知主义的句子生成观，概念的某些侧面没有以语言符号的形式来表达，没有形成语言编码，即"非言语化"。而"省略"意识的形成与语言使用者对句式表达的认知"原型"有关。"非言语化"这一崭新的角度与注重认知的语言学的研究方法，使本书对"省略"这一涉及语义、语法、语用多层面的语言现象具有较强的解释力。

本书探讨了语境因素如何在省略句理解中发挥作用，初步构

建了理解省略句的认知模型。

本书提出了在认知（概念）层面制约省略发生的“焦点言语化原则”，应用此原则解决了以往研究未能很好解释的“会话成分省略的顺序”以及“不完全省略中成分省略与否”的问题。并且首次从认知、语用、语言结构三个层面分析了制约省略发生的原因，提出了三个层面共同作用的省略发生解释模型，并证明了此模型对日、汉语同样适用。

最后，作者对日、汉语中省略现象的使用情况进行了定性与定量对比，并应用本书提出的解释模型对造成日、汉语省略使用情况异同的原因进行了分析。

本稿で用いる記号

＜　＞は、談話における場面・状況を表わす。
（　）は、省略された部分を表わす。
｛　｝は、概念化された内容を表わす。
φは、省略された要素を表わす。
＊は、非適格な発話を表わす。
？は、不自然な文を表わす。

目　次

はじめに……1

0.1 分析資料……4
0.2 本稿の立場……5
0.3 本研究の意義……6
0.4 本稿の構成……7

第一章：省略についての先行研究 ……9

1.1 本章の目的 ……9
1.2 日本語の省略現象に関する研究……9
1.2.1 現象指摘期……9
1.2.1.1 高津鍬三郎……9
1.2.1.2 岡田正美……10
1.2.1.3 松下大三郎の「含蓄」 ……11
1.2.2 山田以来の研究……14
1.2.2.1 山田孝雄……14
1.2.2.2 三上章……21
1.2.2.3 永野賢……23
1.2.3 機能的分析 ……23
1.2.3.1 久野暲 ……23
1.2.3.2 塚田浩恭……24

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1.2.4 談話分析・テクスト分析.....25
1.2.5 語用論的研究.....27
1.2.5.1 小泉保.....27
1.2.5.2 塚田浩恭.....27
1.2.5.3 姚灯鎮.....28
1.2.6 社会言語学的アプローチ.....28
1.2.7 認知言語学的アプローチ.....29
1.2.7.1 吉川千鶴子.....29
1.2.7.2 Hubbard, Maki Hirano.....29
1.2.7.3 甲斐ますみ.....30
1.3 先行研究の問題点.....31
1.3.1 省略の定義について.....32
1.3.2 省略の原因について.....37
1.3.3 省略の条件・規則について.....37
1.3.4 省略の推意について.....37
1.3.5 省略の職能について.....38
1.4 本研究の位置づけ.....38

第二章 省略現象の認知的基盤.....41

2.1 本章の目的.....41
2.2 言語研究の認知的なアプローチについて.....41
2.2.1 言語学の発展の必然性.....41
2.2.2 認知言語学の言語観.....46
2.3 「省略」とは何か.....49
2.4 話し言葉の性格と省略.....53
2.5 「省略現象」について.....56

2.6 まとめ..... 58

第三章 省略と認知..... 60

3.1 本章の目的..... 60
3.2 発話文の意味について.....60
3.2.1 発話文と概念表出..... 60
3.2.2 発話文の意味とは..... 61
3.3 コンテクストについての認知..... 63
3.3.1 コンテクスト要因の整理..... 64
3.3.2 コンテクストと発話の意味解釈.....69
3.3.2.1 場面依存型発話..... 70
3.3.2.2 文脈依存型発話..... 75
3.3.2.3 知識・常識依存型発話..... 78
3.4 省略文の意味解釈.....82
3.4.1 省略文と概念構造..... 83
3.4.2 実質的な概念を持っていない語とゲシュタルト的な意味構築.....90
3.5 まとめ.....96

第四章 言語化と情報構造..... 98

4.1 本章の目的..... 98
4.2 日本語における省略現象の実態..... 99
4.3 省略の成立に関わる問題：久野理論への疑問..... 105
4.3.1「省略の根本原則」の問題点.....106
4.3.2 「省略順序の制約」の問題点.....110

4.3.3 「不完全省略」の問題.....127
4.4 「焦点化の制約の原則」について.....134
4.4.1「焦点化の制約の原則」.....134
4.4.2 焦点化の制約の原則による省略現象に対する解釈.....140
4.5 まとめ.....152

第五章　非言語化を制約する言語構造と語用的要因.....154

5.1 本章の目的.....154
5.2 言語構造の要因.....154
5.2.1 主語の予測性.....155
5.2.2 呼応表現.....158
5.2.3 助詞の表現性.....160
5.2.4 慣用句の省略.....166
5.3 「非言語化」を制約する語用的要因.....167
5.3.1 省略文の必須性——省略文の語用的職能.....167
5.3.2 「ものいわぬ」日本文化について.....177
5.3.3 助詞の非言語化について.....179
5.4 まとめ.....184

第六章 非言語化現象の日中対照.....186

6.1 本章の目的.....186
6.2 制約の原則による省略現象の解釈.....186
6.3 中国語との対照.....192

6.3.1 中国語の省略についての研究.....193
6.3.2 日中両語の省略現象の比較.....197
6.3.2.1 主語の省略.....197
6.3.2.2 述語（谓语）の省略.....199
6.3.2.3 複文の非言語化.....200
6.3.2.4 その他.....201
6.4 省略表現のあり様——データ調査.....220
6.5 まとめ.....224

第七章 まとめ.....226

参考文献.....233

后记.....243

はじめに

日本語は省略[1]の多い言語だとよく言われている。

日本語の日常会話文では、本来ある成分が存在するような位置にその成分が現れない発話文が頻繁に見られる。次の例を見てみよう。

(1)<S、T、Uは、海外旅行のとき、Tがウニを拾ったことについて話す>

U：ウニ、100個ぐらい拾うの？

T：そう。

S：食べた？

T：食べた。

S：ほんとに。[2]

---

[1] 従来「省略」という術語でいろいろな現象が指されていた。「広義には通時、共時いずれをも含められるし、ダイコン→ダイコのような音韻脱落、聲→声のような略字、高等学校→高校のような略語など、音韻、文字、語彙についてもいえるが、特に共時態における文法現象としては、文において本来あるべき要素が、種々な条件によって実際の発話において現れないことをいう」（『国語学大辞典』）。本稿でいう「省略」は発話というレベルに生じた文法・語用的な現象、ある発話文の成分が実際の発話において現れないことを指している。

[2] 本稿で特に出所を注記していない例文は『日本語ジャーナル』（1-14号）（外語教学与研究出版社 アルク 1999-2001）から引用したものである。

この会話文はきわめて簡潔で、言語化された成分はほんのわずかしかないが、コミュニケーションを差し支えなく行なっている。「本来ある成分が存在するような位置にその成分が現れない」というような現象を、従来「省略」現象と呼んでいる。

(1) の文の言語化されていない成分を言語化したら、いわゆる「完全な形の文」に復元[3]したら、会話文としてかえって不自然になる。

U：(Tさんは) ウニ (を) 100個ぐらい拾うの？
T：そう (だよ)。
S：(Tさんはそのウニを) 食べた (の) ？
T：(私はそのウニを) 食べた。
S：ほんとに (食べたの)。

では、なぜある成分が言語化されていない方が自然な文であるか。言語化／非言語化を制約した要因は何であるか。

本稿は省略文の意味理解、省略を制約した要因、省略現象の使用実態といった面から、日本語の会話文における省略現象の考察を行い、その上で、省略文の産出・理解プロセスに働く規則を究明することを目指す。

同じ省略現象は中国語にも多く見られる。

---

[3]従来の研究では「省略文」は必ず「完全な形の文」に復元できると考えられているが、本稿はそのような考え方に賛成しない。その理由については第二章、第三章で詳しく述べる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com